第7章
副読本
46～47ページ

私の挑戦

年　　組　　番　氏名

1 ３年間，駅伝の練習に取り組み，さらにチームのために選手のサポートをした作者の気持ちを考えて書きましょう。

私の挑戦

　私はずっと迷っていました。駅伝の練習に参加するかどうか。
「駅伝は自分への挑戦」私はそう思っています。過去2年間，試走のメンバーには選ばれたものの，本番で走ることはできませんでした。だから今年こそという思いはありました。でも，春の大会で怪我をした左足首が不安でした。さらに今年は昨年までと違い，1校から1チームしか出場できません。今の自分にあの炎天下の苦しい練習をやり抜いて，選手になれるだろうか，自信が持てずにいました。

　私の姉は3月11日の東日本大震災で亡くなりました。まだ17歳でした。
　卒業式の準備中に突然起きた大きな揺れ，そして大津波。女川の町は何もかも流されてしまいました。
　その夜，総合体育館に避難していた私に，届いた知らせはあまりに悲しいものでした。
　前の夜「おやすみ」と言ったのが最後の会話でした。他にきょうだいのいないわたしは一人っ子になってしまいました。
　中学校でテニス部に入ったのも姉の影響です。最後の中総体は応援に来る約束でした。しかし，その約束は永遠に叶わないものになりました。一緒にテニスをすることも，今度やろう今度やろうと言って，結局できませんでした。
　今になってああすればよかった，こう話せばよかったと後悔することばかりです。姉はもういないのに「ただいま」と帰って来そうな気がします。
　生きたくても生きられなかった姉のことを思うと，やる前から諦めるわけにはいかないと，私は決意しました。駅伝大会に出て，天国の姉に見てもらおうと。
　こうして今年も自分への挑戦が始まりました。毎朝，毎朝繰り返される過酷なタイムトライアル。走っても走っても思うようにタイムが伸びないという現実。足が痛むのに無理をして悪化させてしまい，悔しくて泣いた日もありました。
　練習をリタイヤして，声がけをしていても，つらい気持ちは今走っている人しか分からないのに，こんな私が「ファイト」の一言を本当にかけていいのかわからなくなりました。でも，そんなある日，3年間一緒に駅伝に参加していた一人が，何気なくつぶやきました。
「那美が駅伝やるって言ってくれて嬉しかった」
　自分が頑張ることが，誰かの役に立っていたんだと知り，大会に出て結果を残すことだけが目標ではないと分かりました。みんなが走っている。仲間であり，ライバルであるみんなが走っている。姉に見てもらいたいのは，そんな仲間と一緒に頑張っている自分だったんだ。最後の試走の時は自分にとっての本番だと思い，必死で襷をつなぎました。
　大会当日は選手のサポートと応援に回りました。私は自分に与えられた役割を全力で果たそうと思いました。辛い練習を一緒に頑張ってきた仲間達。大会では5人しか走らなかったけど，みんなの思いが詰まった一本の襷だったと思います。
　今年の駅伝部は，男女ともに入賞を果たし，町の人たちもとても喜んでくれました。きっと姉も見ていてくれたはずです。女川一中では，「女川の元気は一中から」が今年の合い言葉です。

　先日，文化祭実行委員長になりました。
　私の挑戦はまだまだ続きます。

（青志社発行「まげねっちゃ」より）